

## 貴重品収納の漆皮箱、金銀鈿荘唐大刀は最高級宝剣

学術博士・元(社)日本タンナーズ協会専務理事 出口 公 長

漆皮箱といえば正倉院の漆皮箱といわれるほど、著名な品々である。蓋と身、それぞれ一枚皮を雄型に被せて成形し、全面に漆を塗った、いわゆる漆皮箱。この当時、貴重品を収納するのに用いられた容器であること、そして、その後の時代においてこの製作が忽然として途絶えたこともあって、その存在だけでも価値あることと思われる。その漆皮箱にはいくつかの種類があり、用途や由来もかなり明らかにされている。調査品に言及しながら、その概要を毎日新聞社刊『正倉院寶物』(1995～97)から紹介する(本書を以下では「資料」と称する)。なお、漆皮箱の多くには漆塗膜に蜘蛛手断文と呼ばれる亀裂が見られるものもあるが、いずれも修理を受けており、皮革製の素地が露出する箇所はほとんど確認できない。したがって、外観全体とX線透過写真の観察を中心に調査を実施した。

北倉1の御袈裟箱について、資料は次のように述べている。「袈裟とは、壞色(えじき:濁った色、不正色)を意味する梵語カーサーヤの漢訳で、元来インドでは僧侶が身につける衣服を指していた。…北倉には、聖武天皇がご出家の後にご愛用になったと推測される華麗な九領の袈裟が伝わっている。それらの袈裟は国家珍宝帳の筆頭に、〈御袈裟合玖領…右納漆皮箱三合箱別

納以碧綾幞袷裏…〉と記されており、この記述により、九領の袈裟を三領ずつ碧綾のあわせ け さ つ つ み袷の袈裟幞に包んで別々に漆皮箱に納め、漆皮箱を各々緑臈纈の袈裟箱袋に入れて、全体を漆の櫃に納めて献納したことがわかる。」「袈裟箱は、その技法に因んで漆皮箱という。製法は、まず木枠を作り、上に素地の生皮を張り固め、その上に全面に粗い布を着せ、さらに黒漆を塗り、すきうるし透漆を塗り重ねている。その後、木枠を取りはずし、内面を仕上げる。漆皮箱は、『東大寺献物帳』や『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』などに散見するが、単に「皮箱」、「革箱」とも記され袈裟箱や鏡箱などに用いられている。当時は貴重なものを納める箱として珍重されていたことが窺える。その後、平安時代に入ると皮箱の製作は急速に衰え、その伝統は途絶えてしまった。」

### 御袈裟箱 第1号

資料:縦44.5cm 横38.6cm 高さ12.4cm

[調査の結果]

袈裟を3領収めていた長方形の箱。蓋、身とも布着せをし、口縁部には補強のため幅2cmほどの麻布を巡らせている。身の裏側では血管跡が黒っぽい網状の筋となって明瞭に見られ、面積の半分近くにまで広がっている。隅の方には鱗状の文様が認め

られる。部分的な血管跡および鱗状の文様は牛皮や鹿皮に多く見られる一般的な特徴をもっている。現物では、この鱗状の部分において漆塗膜に亀裂が広がっている。皮の歪が大きいと推察される。身の側面を観察すると、反りの大きいものと小さいものがある。皮の銀面を表側にして張られているが、その銀面側で湾曲している。すなわち、皮の肉面側よりも銀面側の緊張が大きいと推察される。



御袈裟箱第1号 「材質調査報告書」から

蓋は角の部分で漆が一部剥落しているが、皮を思わせる特徴は見えなかった。全体としては大きな反りはないが、とくに素地に布貼りしている部分の反りは軽微である。身で確認したような血管跡はみられない。この点は漆皮箱の概観上とくに重要である。身の方では多く観察されているのに蓋の方では少ない。このことはつまり、製作者は、蓋と身の皮を使い分けるといった選別眼をもっていた可能性がある。それにはもちろん、最高級品の漆皮箱を製作するにあたって皮素材が十分に供給されていたことも窺わせるものと著者は考えている。いずれにしても、素材に関して鹿皮の可能性も否定はできないが、皮の厚みおよび箱の大きさなどから、総合的な判断としては牛皮と考えられよう。なお、延喜内蔵寮式の「革篋」の項の記述内容からも、この大きさの箱は牛皮と推定される。

北倉42の鏡箱類について資料は「北倉には現在十八面の鏡が伝わる。国家珍宝帳

には計二十面の鏡が記載されているが、そのうち二面は鎌倉時代に盗難にあって失われてしまった。…鏡を大別すると以下の四ないし五種類に分類できよう。第一のグループは、第1号から第4号までの大型鏡の容器で、杉製・合口造りで、素地のまま仕上げられ、大変頑丈な箱である。第二のグループには、小型・円形の鏡箱九合があげられる。皮製黒漆塗の箱で、印籠蓋の第8～10、17号の四合と被蓋形式の第6、7、15、16、18の五合である。第三には、同じく皮製で八角形被蓋造りの第13号が一合、第四のグループには第5、14号の木胎黒漆塗円形印籠蓋造りの箱二合がある。これらの鏡箱の中には、珍宝帳にも記載されているように、すべて緋色の綾の襯が備えられている。襯はたいてい白楮紙を芯とし、その上を真綿でくるみ、更に白糸でこれを包み、表を緋の綾で、裏は黄または緑色の小菱文綾をあてて縫いつけてある。」と記している。

#### 漆皮箱 第7号

資料：平螺鈿背八角鏡 漆皮箱 径35.5cm 高6.0cm 皮製 黒漆塗 襯は表裏共緋綾  
[調査の結果]

漆：下地は煤入り漆、上層は透き漆で、長年の間に変色して光で栗色に見える。漆は軽い塗りで数回行ったと見られる。新品当時は黒色であったと思われる。

芯：測定した厚さからも、箱の形を保つための木質の芯はないと考えられ、これだけの形状を保っている箱の製造技術は極めて優れていると考える。円形という利点が働いているのかもしれない。



#### 漆皮箱第7号 「材質調査報告書」から

蓋：一部に漆の剥落部がある。蓋の内側を斜光で見ると、裏面には血筋痕も見られ、蜜柑肌状の縞模様が見える。全体として緩やかな凹凸感があることから、皮に歪が生じていると見られる。皮としてはかなり薄く、重ね合わせの凹凸も見受けられず、しかも見事な形状を保っており、優れた加工技術と考える。蓋には生体時の皮の傷跡が窺えることから、銀面層を除去する鹿皮では考え難く、牛皮と思われる。

身：身の外表面に僅かな漆の剥落部分があるが、一見、皮の層らしきものは見えない。しかし、剥落部の顕微鏡写真では線維が膠着したように見えるが、これは生皮に由来するためだろう。広く血管痕が見える。牛皮と思われる。漆の垂れが側面に一様に見られることから、身を逆さにして塗り込んだようである。漆膜には蜘蛛手断文と称する亀裂が走っている。蓋との調和のために、上すばみに整形されており、組立式の木枠で形を整えたものであろう。側面の上辺部には竹の芯が入っているが、形の緩みを止めるためのものと見られる。内面には緋綾が貼られている。

なお、この鏡箱は、正倉院展にはよく展示される頻度の高い逸品である。

#### 漆皮箱 残片

資料 大片：現存長55cm 高11cm

[調査の結果]

大破しているが、箱の蓋と思われる残欠である。大きな毛穴3個が1群になって分

布し、かつ貫通しており、明らかに猪皮である。絹布が角に残り、箱の上辺部には布の芯が入っている。部分によっては裏面に毛穴が見えず、塗りこんだ平面が見られる。角の部分には毛が数本残存している。箱の角・隅はすべて丸みがある。この残欠は、皮箱の材料として牛・鹿に次ぐ第三の素材として利用された貴重な実例である。皮質は薄茶の色を帯びている。



漆皮箱残片  
「材質調査報告書」から

箱の身と見られる小片化した別の残欠についても観察した。毛穴が3個並び、かつ貫通する特徴が見られる。表面には漆膜も残り、毛穴にまで塗料が入り込んでいる。また、皮と漆に隙間があって乳頭層、さらに網様層の一部までの組織消失の好例を示し、茶褐色に変色している。なお、本品は御物調査においても猪皮と判定されている。

ここで強調したいことは、この漆皮箱残欠に関しては、記録の全集ともいべき「資料」にも言及されていない。それは残欠の故かもしれない。しかし、皮革利用史の観点からすると極めて重要な証明品であると著者は考えている。記録的には中倉23第69号櫃に保存されていたものである。

#### 銀平脱八角鏡箱（ぎんへいだつはつかくのかみばこ）

##### 第1号

資料：径36.5cm 高10.5cm 皮製 巾着  
黒漆塗 銀平脱 覆輪は銀 金具は銀台鍍金 底敷は白楮紙

銀平脱八角鏡箱第1号  
「材質調査報告書」から



[調査の結果]

見事な造形である。繊細な形状と、嵌め込まれた銀線の多彩な文様は目を見張るものがある。蓋の漆膜のわずかな剥落部の観察では、砂地のような状態を示し、皮革等のものは認められなかった。身の縁にある剥落部では芯に板状のものが見られ、幾つもの層も見える。ルーペ観察等では「板芯+麻布+砂地状物+漆」のように見える。皮革との断定は出来ない。漆の剥落部で皮質が確認できなくても、箱の立ち上がり部分では木質を使い、他の見えない部分で皮革が用いられている例があるそうである。皮箱と伝えられていることからすると、そのように使われている可能性がある。この箱が皮製とすれば他の方形の皮箱とは異なり、細工が繊細であり、形の崩れがほとんど見られないことなどから、技法的には全く別のものであったと考えられる。優れた工芸品であることに感銘を受けた。

調査員としては、皮革に関する評価は差し控えることとする。

**余談**：漆皮箱は用途によって多様なものがあることは、既述の通りである。ここでは更にどんなものがあるのか、資料から紹介をしておきたい。それは、技法の概要の理解に役立つものと考えからである。漆皮箱の名称だけでは区分が混乱するので、分類番号も併記する。

北倉147 **漆皮箱** 「長方形、被蓋造りの漆皮箱。蓋身とも外面に布を着せ、紐には

二枚重ねの布を巡らす。下地は薄く、黒漆に透き漆を重ねる。」

中倉54 **漆皮箱** 漆皮箱は、紅牙撥鏤こうげぼちるのしゃくはんさいのしゃく尺、斑犀尺など八本の尺のうち、「一尺差しのもの七本の容器として使用されてきたものである。」

中倉94 **漆皮箱** 「蓋も身も面取りした、被蓋造の箱で、表裏全面に布着せし、下地の上から黒漆を二回塗り、研いで透漆を一回施している。上塗りは特に良好で、表面に塵が認められない。蓋と身の縁の覆輪(紐)は布を貼って成形し、身には五～八ミリの内反りがある。雑帯残欠(中倉93)が納められていた箱であるが、墨書や題箋の類がないので、いつの時代から納箱として用いられていたか不明である。」

中倉136～161 **漆箱**

「中倉136 漆皮箱第1号・第2号 中倉137 金銀絵漆皮箱 第3号

中倉138 金銀平脱皮箱 第4号・第5号 中倉139 密陀絵皮箱 第6号

中倉136第1号から中倉139第6号までは、いずれも被蓋造の漆被箱で、蓋・身はそれぞれ一枚の皮を型にはめて成形し、下地のうえに黒漆、透漆を塗って仕上っている。」

## 刀 剣

北倉38 **金銀鈿莊唐大刀** 資料：「金銀鈿莊唐大刀は、出蔵、還納の経緯は不詳であるが、形状が珍宝帳に記載する注記によく一致することから、それとみなされている。唐大刀とは、唐風の大刀という意味であろう。鞘上に鳥獸、唐草、花雲の文様を金粉であらわすが、これが珍宝帳注記にいう「鞘上末金鏤」に相当し、後世の研出蒔絵と同

じ技法といわれている。正倉院の大刀は中倉（8～9）、南倉（119）のも併せて、全部で五十五口あるが、それらの中でも、この大刀は外装、刀身ともに第一級のものといわれている。」「国家珍宝帳によると、御大刀一百口が献納されたが、天平宝字八年九月の恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱、その他で、そのほとんどが出蔵された。現在、北倉に伝える金銀鈿荘唐大刀（北倉38）と、御杖二口（北倉39）が、その残りの品と考えられている。」以下は調査記録である。



金銀鈿荘唐大刀 「材質調査報告書」から

#### 金銀鈿荘唐大刀（きんぎんでんかざりのからたち）

資料：全長99.9cm 把長（<sup>つば</sup>鏝含）18.5cm

鞘長81.5cm 身長78.2cm 茎長13.6cm 把は鮫皮卷白皮懸 鞘は木製皮貼黒漆塗 末まっ金鏤 透かし金具は銀台鍍金 荘玉は色ガラスと水晶 帯執おびとりは紫皮

#### [調査の結果]

鞘：鞘は木製だが、鞘の表面にクモの巣状ひび輝が金属の飾りの間に見られることから、生地<sup>ひび</sup>に極めて薄い皮状のものが巻かれていると考えられるが、露出不十分で確認がかなり困難である。飴色で半透明の様子及び鞘という特異性から見ると、通常の皮ではなくて、例えば腸管のような筒状の動物質を用いた可能性が高い。しかし、『延喜式』の記述に示されているような馬皮の可能性も捨てられない。動物性の組織の確認が極めて困難で、判定はし難い。

把の鮫革つか：柄は俗にいう「鮫皮卷」である。通称鮫革といわれているものだが、鮫皮特有の突起した鱗がなく、粒状の鱗であり、

さらに真珠状の大きな粒があることからエイ皮と判断する。

把の緒（懸緒）：大刀には、明治修復の会符がついており、この革はその時に修復された新しい革と見られる。柔軟な感触があり、乳頭層が薄いように見える。しかし、毛穴が列をなさず散在していることから鹿革ではなく、色目や肌目等を考え合わせると牛白革のように見える。子牛革の可能性もある。馬革との意見もあった。この革は筒のようにして縫い止めてあるので、革の表面には張力がかかり、皺が出にくいように思われる。また、このような縫い目（丸く紵け縫い）では、牛革ならこの形状が維持できないのではないかとの意見もあった。判定は困難である。

帯執：鹿革とみられる。単なる白革に塗り染めたような、色斑のある、表面だけの両面染めの紫革である。白い表面部分がみられることから、燻し革いぶではなさそうである。明治修復の時に、この革緒を結わえ直したように思われる。芯は白いようである。3本の革紐を半分に折って6枚重ねにしてあり、緒の内側の芯を広げると「鳥の絵」らしき白抜きの絵柄が見える。虫穴が随所にあり、虫の糞もあった。外の革にも鳥のような絵柄が見受けられる。丸い窪みも多いことについては、型染め法の跡か、虫食いのためか、あるいは型押しのためか、理由は分からない。部分的にいびつな円形なので、一部は虫食いかもしれない。

帯執を束ねている細い革：緒に巻くのにねじ振れており、細工は雑に見える。片面染の鹿革であろう。帯執及び細い革のいずれも、燻し革かどうかについては判定が困難である。